

地の再生・活用」を手伝う CSR の取り組みによって新たに広がった領域の会社だ。農業と福祉の連携、融合から、新たな事業が生まれた。

「露地で行う難しい農業とはちがい、温度や湿度を機械的に安定してコントロールしやすいハウスなので土にまみれることもなく、障がいのある人々でも十分に働けるはずだ。そんな発想があったのですが、はたして最初の年から手ごたえを感じました。クボタの事業領域である農業が、障がい者雇用の場としてとても有効であることが見えてきたのです。障がいのある人を主体に農業をしたいのです」

佐藤盟信さん(平成 7 年卒)は外交官としてヨーロッパやアフリカと深く関わり多様な価値観に触れたと語った。在学中に本学協定校のオタゴ大学(ニュージーランド)に留学した佐藤さんは、北海道大学法学部の大学院で学んだ後 1988 年に英語の専門職として外務省に入省。経済畑のセクションに配属されて、2000 年からは公費留学でロンドンスクールオブエコノミクスで政治思想を、ケンブリッジ大学国際関係学部で国際関係論を学んだ。それからオランダの日本大使館、ウィーン(オーストリア)の IAEA(国際原子力機関)の日本政府代表部で仕事をして 2009 年からはイギリスの日本大使館に勤務している。東アフリカのタンザニアの日本大使館に赴任したのは 2012 年。外務省に入って 17 年のうち、12 年は国外にいたことになる。佐藤さんは、さまざまな得がたい体験をしたタンザニアでの日々を語った。

タンザニアは、人口5千万人ほど。経済も人口もいま右肩上がりの国だ。佐藤さんがいたのはインド洋に面した港町であるダルエスサラームという中心都市で、高層ビルが建ち並ぶ人口400万人の大都市だ。アフリカの日本大使館員は、日本が援助したプロジェクトの式典などで現地の大統領と会うことも珍しくない。そういうとき、大統領は予定の時間通りには来ないという。

「遅れてくるのがステータスですから、3時間くらいふつうに遅れて登場するのです(笑)。そのあいだ待っている人たちは歌ったり踊ったり。その場にいる日本人は私ひとりですから、私も日本を代表していっしょに踊ります。それも外交官の仕事です」

ダルエスサラームで国際商業祭が開かれ、日本もパビリオンを出した。自動車、電気機器、医療機器、化粧品など、すぐれた日本製品をPRするのが目的だが、佐藤さんは日本文化も知ってもらおうと、出展企業から資金を提供してもらって文化祭を開いた。ミュージシャンやマジシャン、パントマイムなどいろんなタレントを日本から呼んで、楽しいステージを繰り広げた。人手が足りないので佐藤さんもバンドのギタリストとして参加した。海外で現地の人とうまくコミュニケーションをとろうとすると、楽器が弾けたり手品ができたり、スポーツが得意だと好都合なのだ。

アフリカの多くの国は、独立すると植民地時代からの外国系企業の多くは国有化され、社会主義体制のもとで国づくりが進められた。しかし強い産業も起こらず借金ばかりが増えていき、80年代に入るともう破産状態。そこで IMF や世界銀行などからの融資を受けざるを得なくなり、それに伴って融資先の指導を受け外国からの民間投資を入れることになる。21世紀に入って、政治が比較的安定しているタンザニアのような国は、天然資源をベースに製造業や建設、金融、観光、通信といった分野が好調で、成長軌道にある。いまは、これらを裾野の大きな産業としてしっかり育てていく段階だという。

「タンザニアの国民が日本にもっているイメージは良好です。現地の人と付き合ってみるとわか

ることですが、彼らは日本に大きな期待を抱いています」

オランダやイギリスで勤務していた時代、佐藤さんは四六時中競い合うような先進国同士の関係を意識させられた。しかしタンザニアでは、ほとんどの人が日本に好感を抱いてくれていて、これまでの日本の援助に感謝の気持ちを持ってきていた。外交官としてまったく新鮮な体験だった。いつかまたタンザニアで仕事をしてみたい、佐藤さんはそう強く思っている。

佐藤さんは、日本はこれから、アフリカ諸国の期待に応えるための今日的な方法を考える必要があるという。たとえばODAによる援助だけではなく、官民が連携したB to Bのビジネスだ。そこでは大企業ばかりでなく、技術や個性をもった元気な中小企業に関わる余地も大きい。そして他方で、日本国内に対して、日本がアフリカと関わる価値や可能性を訴えていく必要もあるだろう。それは、経済指標の文脈を越えた、もっと広い意味での国益に資する文脈だ。

公務員と民間人、民間企業にはそれぞれ役割分担がある。外交官だと比較的容易にその国の大臣などに会うこともできるが、企業人には難しい場合もある。その国のことを総合的に広く知り、日本の人や企業との橋渡しをするのが外交官の仕事だ。佐藤さんは、海外に飛び出したいと考えている若い世代へメッセージを贈る。

「オススメしたいのは、欧米やオーストラリアといった知られた国ではなく、むしろ自分が知らない国です。その方がずっとおもしろいと思います。相談を受ければ僕も後輩たちにいろいろアドバイスしますよ。ネガティブなことを考える必要などまったくない。それが学生の特権だと思います」

## ○働きながら学び続けること

平成29年の世相を表すキーワードの一つが「人生100年時代」であろう。従来の標準的なキャリア感も大きく変化し、一生学び続けることの重要性が認識された年となった。エバーグリーン講座講師のなかにも社会に出てからの学びを通じて劇的なキャリアチェンジをしたり、人脈を大きく広げること成功した方が多数いる。

道内大手のIT企業(株)HBAに入社し15年目にして業界で数少ない女性管理職として活躍しているのが東野里絵さん(平成11年卒)。多忙な業務と両立させて社会人学生として夜間の企業経営コース(北海学園大学経営学部)で学び産業カウンセラーの資格も取得した。

東野さんは学生時代からSE志望だったので就活もほぼIT業界だけ。数社を受験して、最終面接に残れたHBAに入社。最終面接で会った社長の人柄にも惹かれた。新人はまずプログラムをしっかり学ぶ。文系でもしっかり勉強して文法が分かればまったく問題はなかった。5年目になると少しずつ仕事を任されるようになり、7年目には主任に昇格。仕事に慣れ、会社や組織の課題に気づくことも増え始めたころに、経営と心理学の両方を学べるころに魅力を感じて北海学園大学への入学を決めた。講義は18時50分からなので会社は定時で上がらなければならず翌朝7時に出社して前日残った仕事を片付ける日々が続いたが明確な入学動機と強い意志で1年後に規定の単位を取ることができた。その後、組織心理学を学んでさらに心理学に興味を持つようになり、今度は産業カウンセラーの講座に通う。

「IT業界のメンタルヘルスの問題は自分の周囲とも無縁ではありませんでしたし、業界全体の

大きな課題。なにか私にできることはないのかな、という自分への問いもありました」

しかし産業カウンセリングの勉強を始めて一番感銘を受けたのは、他人をカウンセリングする前に「自分のことをわかっていないとカウンセリングはできない」という大前提を知ったことだった。このとき東野さんは、自分と深く向き合うきっかけをつかむ。カウンセラーの役目は相手にアドバイスすることではない。相手の話をひたすら聞いて、まるごと受け入れるのだ。34歳のときに課長代理になってから部下もでき、現在は社内の育成責任者として部下を育てる立場になった東野さんは、社会人になってから始めた新しい学びの価値を実感している。

本学の大学院商学研究科には専門職大学院であるアントレプレナーシップ専攻「小樽商科大学ビジネススクール(OBS)」が設置されている。開設後15年が経過したOBSではさまざまな業界で活躍する幅広い世代の社会人が日々真剣に学びと向き合っている。

岩見真彦さん(平成元年卒)は、ビジネスの現場で学生時代の学びをさらに深め実践するためにOBSに入学した。岩見さんは卒業後に第一勧業銀行(現・みずほ銀行)に入学し東京のいくつかの支店に勤務したが、みずほ銀行札幌支店に異動したことがOBS入学のきっかけとなった。OBSでは分析フレームワークの習得からアントレプレナーシップについての考察、そして文章力を一から鍛え直せたことが良かったという。世代や業種もちがう多様な学友が、高い目標と強い意志をもって学び合う体験も刺激的だった。

そしてOBSの精神の源流にあるのが、やはり「緑丘会」だ。岩見さんは後輩たちに、このリソースを最大限に活かすべきだと呼びかける。

「実際の企業についてや資格を取るためにどんな風に勉強するか、そのためにどこを選ぶのがいいかなどについては、まず先輩に聞くことをお勧めします。緑丘会の集まりにもぜひ参加してください。『求めよ、されば与えられん』という言葉通りだと思います」

芸能プロダクション(株)オフィスキューで執行役員を務める北崎千鶴さん(平成27年OBS修了)は経験を積む中で、組織の中でみんなに頼られるゼネラリストになろうと考えるようになった。そのためのステップアップとしてどうしても学びたかったのがOBSだった。さいわい、会社の理解も十分に得ることができた。

「OBSでの2年間は、経済や経営全般への視野を広げた厳しくて濃密な時間でした。ここで私はビジネスの基礎に加えて、ケーススタディによる実践的な講義で、論理的思考がとても鍛えられました。また繰り返されるディスカッションから、独学では決して得られないたくさんの知見や気づきを得ました。それらはいま毎日の仕事に生きています」岩見さんと同様に、OBSを通じて小樽商科大学の卒業生のネットワークに連なることができたことが良かったという。

「在学中に机を並べた、世代も業種もちがう同窓生がみな高い意識と志をもっていて、大きな刺激を受けました。学友たちはみんな私のリスペクトの対象でした」

東京と香港でそれぞれ大手監査法人に勤め、帰札して実家の会計事務所を継いだ小嶋京子さん(平成5年卒/平成28年OBS修了)は、仕事を通じた地元企業の経営者たちとの交流から、自分の仕事を北海道のためになるものとして位置づけるために選んだ場所がOBSだった。

「2代目経営者である自分をさらに成長させたくて、OBSで学ぼうと思ったのです。仕事をしな



がらの2年間で尋常ではない量の課題をこなしました。MBA(経営管理修士)を取った2016年春から、自分はまた新たなチャレンジのステージに上ったと思っています」

小嶋さんは現在、税理士法人と公認会計士事務所の代表を務めながら日本公認会計士協会北海道会の幹事や日本公認会計士協会の公会計協議会委員と公会計委員会委員などの要職にも就いた。加えて一般企業6社の非常勤監査役を務めている。また母校小樽商科大学の監事もお務めいただいている。

「新たな分野への挑戦には、OBSで出会った、多世代にわたる異業種の優秀な人々から受けた刺激が背中を押してくれています。父が起こした会計事務所を、私の代でこれからの時代に向けて、さらにどのように進化させていくか。一経営者としても、取り組むべき大きな課題があります」

学部を卒業してそのままOBSに進学する方もいる。田中康浩さん(平成17年卒/平成19年OBS修了)。学部を卒業したのちもう少し勉強をしたくてOBSへの道を選んだという。

「企業の社長さんや大企業でマーケティングをしていた方など、いろんな方に出会えてさまざまな価値観を教えてもらえたことがよかったです。ビジネスにひとつの正解はないので、ディスカッションをしていくなかで問題の本質を見失うと、決まるものも決まらないことがありました。この問題の本質はなんだ?常にそこから発想することもOBSで学びました」

現在は証券アナリストとして活躍する田中さんだが、この資格について知ったのもOBSだった。

「税理士や会計士もいけれど、会計を使ってもっと幅広く仕事をやりたいと思うようになり、経済や会計の知識を生かして証券アナリストのような面白い業界で働きたいと考えました」

## 〇おわりに

エバーグリーン講座は、現役学生が卒業生のキャリアに触れることができる貴重な機会であり本学のキャリア教育の特徴の一つとなっています。登壇していただく講師のみなさまは、実際の仕事内容や業界の最新情報を紹介しつつ、ご本人のキャリアの変遷とその節目における大小の決断、その決め手となった具体的な事例や長い社会人生活を振り返って獲得した職業観、人生観といった多彩な話題にも触れていただき、毎回講師の職業人生が凝縮されたエキサイティングな90分間を味わうことができます。本稿の狙いはそれらの講義の随所で講師が(ときに無意識に)例示する社会人基礎力の具体的な実践と発揮およびそれらにつながる背景と文脈に焦点を当て、「先輩の職業人生から社会人基礎力を学ぶヒント」を示すことにありました。直近の4年間の講義録のみを素材としたため過去30年間350名に上る大先輩たちの金言の大半を紹介することができなかったことがいささか心残りではありますが、これからエバーグリーン講座を受講する商大生たちが、豊かな職業人生を送るための“生きた教材”として多くのことを学びとるための手がかりとして活用してくれることを強く希望します。平成25年度以降の各講義の様子は専用のコミュニケーションサイト([www.facebook.com/oucevergreen/](http://www.facebook.com/oucevergreen/))で全文を公開していますので、すべての商大生はもちろん、卒業生のみなさまにも読んでいただき「エバーグリーン講座が繋ぐ小樽商大のDNA」を共有していただくことを期待します。

平成20年代の終盤は、「一億総活躍」や「働き方改革」、さらに「人生100年時代」など、これから社会に出る若者たちはもちろん、私たちすべての現役社会人にとっても「働くこと」の意味を見

つめ直し、これからの時代の働き方について考え方を整理する機会の多い時代でした。平成 18 年に経済産業省が中心となってまとめた「社会人基礎力」についても、ライフ・ワークバランスの価値観の大きな転換のなかでその位置づけや役割を再定義し、人生 100 年時代にすべての人が学び成長し続けるための指針として“バージョン・アップ”させる動きが出始めてきました。他の大学に先んじて取り組んできた「大学の同窓会による母校のキャリア教育支援」の一つの成果として平成 25 年度から毎年発刊してきた本白書の役割も次なる段階に進化させることが必要になってきたのかもしれませんが。引き続き現役学生の未来のためにご支援ご助言をいただけますようお願いを申し上げます。

なお、本稿の素材となったエバーグリーン講座講義録の作成は、佐藤優子さん(平成 23 年度)、田口智子さん(平成 24 年度)、および谷口雅春さん(平成 25 年度～)の3名のプロのライターに担っていただき、谷口さんには本稿作成にも多大なお力添えをいただきました。講義期間中は毎週小樽まで通ってすべての講義を聴講していただくことで、講師たちの想いと現役学生との心の交流を汲み取り素敵な言葉にまとめ上げていただきました。ここに記して謝意を表します。